

---

# 舞いふる雪

ファイヴ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

舞いふる雪

### 【Nコード】

N0514A

### 【作者名】

ファイヴ

### 【あらすじ】

人間に自分の姿が見えるはずなどない。新米死神は、意気揚揚と一人の少女を迎えに行く。だが、死を間際に控えた少女には、死神の姿が見えていた。少女と死神の出会いが死神の心を溶かし、一緒に居る事が二人の楽しみとなっていた。しかし、少女に残された時間は一週間。二人は、最後に奇跡を起こす。

## プロローグ

弔問に訪れた人々は、一様に沈痛な面持ちで列を作っている。  
俺は、列から外れるようにしてタバコをくゆらす。

このような場で不謹慎なのかもしれないが別に構わないだろう・・・  
俺が見える人などの中には居ないのだから・・・一人の老婆が、  
昨夜未明に息を引き取った。

近所の人達にも愛され、その最後は駆け付けた大勢の人々に見取られ大往生を遂げる事が出来た。

無論、俺もその場に立ち合ったのだが・・・その夜は、夏なのに、  
夕方から降り始めた雨が一段と強くなり周囲の雑音を打ち消すほどの豪雨だった。

俺は、老婆の自宅の縁側に腰を落ち着け、相も変わらず流れる紫煙を眺めていた。

しばらくすると、パタパタと忙しそうに女性が走ってくる。

顔色は蒼白で、表情も堅い。

俺の目の前で止まると背にある襖を勢い良く開ける。

襖の奥には、すでに大勢の人が老婆の眠るベッドを囲んでいた。今、  
息を引き取ったところだよ・・・」

スーツ姿の男がうなだれて力の無い声を出す。

それに呼応するように啜り泣く声が聞こえた。

「そんな・・・お母さん・・・」

先程の女性は、どうやら老婆の娘のようだ。

俺は、タバコを投げ捨てるとゆっくり立ち上がるとその部屋に入る。  
ゆっくりと部屋を見渡すと、目頭を押さえているもの。

ただ、止めどなく涙を流しているもの。

虚空を見つめるもの。

・・・と、それぞれ、この悲しみに打ち拉がれていた。

ただ一人、老婆の安らかな表情を除いて……

それが、昨夜の出来事……

今日は、昨日の雨が嘘だったかのように青空を広げている。

セミ達は、自分の一生を呪うかのように、悲鳴のような鳴き声を上げ、暑さを一層感じさせる。

ま、俺にとっては暑いなど関係のない事なのだが……  
どちらにしろ、この天気は老婆の日頃の行いがよかったからなのだろう。

「さて」

タバコをもみ消すと老婆の眠る棺へと向かう。

これで、何人目に……いや、もう正確な数など憶えていない。  
死者の魂を迎えにあがるのは……

## プロローグ（後書き）

初めて書くのですが、たぶんグテグテだと思っています。意見、指導がありましたら、よろしくお願いいたします。

1話・居酒屋『三途の川』（前書き）

深夜にようやく1話を書き上がりました。よろしくお願ひします。

## 1話・居酒屋『三途の川』

「初めての仕事だが、お前なら大丈夫さ」

先輩は、俺の肩をポンと叩く。

居酒屋は、仕事上がりの死神達でこった返していた。

ここは、死者が最初に訪れる場所・・・

現世との境界。

昔は三途の川と呼ばれていたそうだが、俺が死神のライセンスを取った頃には、あちらこちらにビルや飲食店が立ち並んでいた。

三途の川は、当の昔に埋め立てられたそうだ・・・

「何か、緊張しますね・・・ただ、死者の魂をここに連れてくるだけなのに・・・」

ジヨッキをぐいと飲み干すと鼻に付いた泡を手の甲で拭い去る。

「まあな。俺も最初は緊張したもものさ。明日だっけ？初仕事は」

「はい・・・とりあえず時間は一週間あるんですが・・・」

「初仕事ならその位時間に余裕があれば何とかなるだろう。ま、あまり小難しく考える事はないよ」

先輩はカラカラと笑うとビールを注文する。

確かにそれほど難しく考える必要は無い。

死神の仕事は、ただその人間がその一生を終える時に迎えにあがるだけ・・・誰にも見られず、その存在すら感じる事は出来ない。

そう、後は目的の人物の耳元で死を宣告する。

本人には、聞こえないが死神の言葉はそれだけで絶大な力を発揮する。

明日、あなたは死ぬ。

そう宣告するだけで、云われたほうは、抗ことも出来ず次の日にはこの世から去る事になる。

それで終わり・・・その後、魂は死神の手によって、ここへ連れて来られる。

それで、死神の仕事は終わりだ。

「おい？どうしたんだ？」

「え・・・あ」

不意に声を掛けられ、俺は動揺した。

「まだ、悩んでるのか？」

「いや・・・別に・・・」

そう、悩んでなどいない。

ただ、初仕事で感傷的になっているだけだ。自分にそう言い聞かせる。

「一週間も時間があるんだ、さっさと宣告してしまつて休暇でもしてるよ。どうせ、また忙しくなるんだから」

先輩は、ごきゅごきゅと喉を鳴らせてビールを飲み干す。

「そ、そうですね」

心の中で何かが吹っ切れた。

そう、1週間なんて猶予は新人に与えられる特権みたいなもの。

さっさと済ませて自宅でゴロゴロしてるに限る。

これから先、急な仕事が入らないとも言いきれない。



「お！その表情は、吹っ切れたな」

「ええ。先輩のおかげで何とか」

俺は、負けじとジョッキを傾ける。

「はははっ！そうだ、その意気だ」

そう・・・その時は、それほど深くも考えていなかった・・・

・・・あの不思議な少女に出会うまでは・・・

.....

1話・居酒屋『三途の川』（後書き）

まだ、話は展開を見せていませんが次回には何とか・・・

## 2話・少女

次の日……

高さ30メートルはあるだろう現世とを繋ぐ門の前に俺は立っていた。

「えーっと……」

門番は、ファイルをパラパラと捲りながら渋い表情をしている。

「あー！あつたあつた。あなた、今回が初めてですね？」

門番は、下がった眼鏡を正すと、俺を上目遣いで一瞥した。

「は、はい……」

「一応、知ってると思いますけど、簡単に説明しますね。あなたはこれから目的の人物に対して死の宣告をして頂きます。その際の注意点なのですが、必ずその人物の耳元で告げて下さい。そうしなければ、何の効力も発揮しません」

「はい」

「それから、あなたに与えられた時間は一週間ですね……つまり、現世に赴くと最長一週間は戻って来れません。行ったその日に宣告して魂を連れて来ても構いません。判断は、全てあなたに委ねられます。……ここまでは、よろしいですか？」

「はい……」

どれも、学校で習った話だ。

「次に、これだけは注意してください」

門番は、ファイルを閉じると声のトーンを落とす。俺は、何だろかと首を傾げた。

「期間は、必ず守って下さい。日付はあなたが現世に降りた時間からカウントされます」

それは、知っている事だが・・・

「もし、時間を超過した場合・・・あなたは、こちらの世界に戻る事は出来ません。目的の人物も幽体になり現世を彷徨う事になります。幽体に関しては他の死神を派遣し回収出来るのですが、あなたは一切の力を失い現世を彷徨う事になります。こちらは、いかなる者でも回収出来ませんので注意を・・・」「そうなんですか」

別に大した事じゃないじゃないか。

これだけ余裕があつて時間を越す事などありえない。

「最後に、今回の目的人物の書類です」

門番は、ファイルから紙を一枚取り出すと俺に差し出す。

それを受け取ると同時に門がギギギと重厚な音を立てて開き始めた。

「そちらの書類は、目的の人物が書かれた大事な書類です。決して紛失しないように。それでは、よい成果を・・・」門番が云い終わると門は、完全に開ききっていた。

門の先は白く歪んでいる。

そう、とつとと済ませて戻って来よう。

どうせ、人間にはわからない事なのだから・・・

唾を飲み込みゆっくりと歩を進める。

門を潜ると目を開けていられないほどのまばゆい光りに包まれる。

「期限だけは、忘れないように」

遠くで門番の声が聞こえた。

何の匂いだろう・・・

鼻を突くような臭いがする。

ゆっくりと瞼を開ける。

白い壁に白色の蛍光灯。

スライド式のドアが並び番号が振られている。

課外授業で一度だけ来たことがある。

確か、病院とかいう場所だ・・・

白のキャップをかぶった女性がパタパタとスリッパを鳴らしながら  
慌ただしく俺に向かって突進してくる。

「うわっ！」

俺は、身構えるも女性は、俺の体を摺りぬけて行く。

「あ・・・」

体と摺りぬけた女性を見比べる。

しかし、女性はすでに廊下の奥に消えていた。そうか、俺の姿は人間に見えないんだった。

触ることも出来ないんだな・・・

一人感心する。

さて、とつとつと済ませますか。

俺は、書類に目を通そうと右手に視線を落とす。

.....!

無いつ!

正確にいうと半分以上千切れて無くなっていた。

おそらく現世に飛ばされた時、千切れたねかも・・・

そんな・・・・・・

血の気が引く。

頭が鈍器で殴られたかのようにグラグラと揺れる。

倒れそうになるのを堪え、絶望感に浸りながら残った紙切れに視線を移す。

室 306号って、これだけかよ!

と、打ち拉がれていると目の前に306と表示された病室があった。名前を見ると個人部屋のようである。

なるほど、目的地に飛ばされるようになっていたのか・・・

それなら、書類なんて最初から必要無いじゃないか・・・

ホッと胸を撫で下ろすとその病室のドアに手を掛ける。

カラカラとドアは、軽い音を立ててスライドする。

風が鼻を撥った。

夏の香りがその一室には充満している。

晴れ渡る空から注がれる日光に照らされ少女は外を眺めていた。

肩まで伸びた髪が、風に揺られながら . . . . .

## 2話・少女（後書き）

暇を見つけては書いてます。意見等お願いします。



### 3話・出会い（前書き）

3ヶ月ぶりの投稿です。色々と忙しくて、投稿が遅れたしまいました（言い訳）

### 3話・出会い

俺は、動く事が出来なかった。

まさに風景との同化・・・いや、同調と云えばいいのだろうか・・・

少女が、風景に溶け込んだのだろうか

それとも風景が少女に飲み込まれたのか

それは、まるで絵画を見ているかの如く、琴線を振るわせた。

そう、俺の時は止まっていた。

「誰？」

突如、少女は振り返ると俺を見据える。

「あ、俺は.....」

.....え？」

ミエテル？

少女は怪訝そうな表情をしながら首を傾げる。

「お・・・お前、見えてるのか？」

少女は、ニコツと微笑む。

見えている……

こういう場合は、どうしたらいいんだ？

とりあえず、耳元まで行つてとつとと宣告してしまうか？

いや、見えている以上は安易に近付けない……

思考フル回転であるが、混乱に近い状態だった。

「おじさんは、誰？」

「お……おじさん？……俺が……ちよつと待て！俺はまだおじさんなんて歳じゃないぜ」

などと少女相手にムキになる俺……

「じゃあ、お兄さんだね」

お兄さん？それもまた引つ掛かりを覚える。

確かに、人間と死神では寿命が違う。

あつちの世界じゃまだまだ若造なのだが、こつちの世界で生きていたら、妖怪だ何だと恐れられるくらいは生きている。

つて、事は……俺は、どう呼ばれるのが妥当なのだ？

おじいちゃん……？

頭をぶんぶんと振り乱す。

ありえん……何を考えているんだ俺は。

「おじさん？」

少女は、キョロキョロと忙しく辺りを見渡す。

どう呼ばれようがそんな事関係………ん？

「おじさん……」

少女は、寂しそうな表情をすると俯いた。

と、同時にナースシューズの音が病室の前で止まるとカラカラとドアがスライドし看護婦が中に入ってきた。

「あら、また窓を開けて……駄目って云ったでしょう」

若いナースは、開口一番大きなため息を吐く。

「あ！看護婦さん、さっきおじさんが来てたんだよ」

少女は、満面の笑みでナースに俺との出来事を告げる

「おじさん？」

ナースは、首を傾げながらスリッパをパタパタと鳴らし窓際へと歩を進めた。

「うん。でも、おじさんは、おじさんって呼ばれるのが嫌みたい」  
身振り手振りで、ナースに伝えようとするが、ナースは首を傾げるばかりだ。

しかし、さっきから気になっているのだが少女の視線とナースの位置がずれているのはなぜなんだろう？

窓を閉めると、ナースは少女の検温と2、3質問をして病室を後にした。

その時も、少女の視線とナースの位置はずれていた……

静まり返った病室。少女は、仕方なく眠る事にしたのか横になった。

俺は、というと・・・さつきから、ずっと同じ場所に立ち尽くしていた。

看護婦には、俺の姿は見えなかった・・・  
なぜ、この子には見えるんだ？

ん？待てよ・・・黙っていたら気がつかなかったな。  
声は、聞こえているのか・・・

まさか・・・。

まぐれだな・・・うん。まぐれ。

など、自分の中で、色々と先ほどの少女との不可解なやり取りを検証する。

とにかく、もう一度声をだして見よう・・・それで、はっきりするはずだ。

たかが、人間に死神の声が聞こえるはずがない。  
自分に言い聞かせると恐る恐る声を掛けてみる。

「お、おい・・・」

すると、少女はベッドから飛び起きるようになり、上半身を起こした。

「うわっ！」

俺は、驚きのあまりその場でしりもちをつく。

「おじさん！まだ、居たの？」

少女は、目をキョロキョロとさせながら声の出所を探しているようだ。

声が聞こえて、見えないはずは無いのだが・・・

やはり・・・

「君・・・目が見えないのか？」

俺は、思わずそう云っていた・・・

少女は、ようやく私の位置を把握し、にっこりと微笑むと、

コクンと頷いた・・・

### 3話・出会い（後書き）

これからは、ちゃんと更新して行くつもりですので、よろしく願  
いします。

#### 4話・屋上にて

太陽が少し西に傾いていた。  
それでも、雲ひとつ無い青空から、日光が容赦なく俺を照らしつける。

屋上のベンチに寝転がりながらタバコに火を点けた。  
深く吸い込むと、それを太陽目掛けて大きく吐き出す。

目が見えないのか――

あの時、なぜそんな事を聞いたしまったのだろう。  
思わず、そう口にしていた・・・

会話は、そこで途切れ二人の間には無言の時間が流れた。

居辛くなって、一服がたら屋上へと逃げてきたのである。

「おう！何してんだおまえ」

不意に呼ぶ声が出てベンチから起き上がる。

「あ・・・」

呼ぶ声の主は、俺と同期の死神デイルの姿があった。

デイルは、歩み寄ってくると俺の隣に腰を落ち着ける。

「タバコ一本くれないか？」

俺が、無言で差し出すと拝むような仕草をしてケースから一本タバコを抜き取る。

火を点けてやると美味しそうに煙を吐き出す。



「おまえも、この病院に？」

「ああ・・・じゃあ、ディルも一緒か？」

「まあな。寝坊してさつき到着したばかりだ」

ディルは、からからと笑った。

「で？お前は、いつからこっちに来てるんだ？」

「俺か？今日からだよ・・・」

タバコの灰がぼとりと地面に落ちる。

「ん？どうした。いつものお前らしくないな」

俯いている俺の顔を覗き込むようにしてディルは聞いた。

「あ・・・いや、俺・・・今日が初めてだから。緊張しているのかもな」

笑顔を作って明るく振舞おうとしたが、うまくいかない。

「そっか・・・ま、最初は誰もが緊張するさ。俺だってそうだったし」

ディルは、成績も優秀で同期の中では一番最初に現世での仕事を行っていた。

新卒の仕事は学校での成績順で順番が決められる。

俺は、中の下だったので、ディルとの経験の差は驚くほど開いている。

「ディルは、いつまでこっちに居るつもりだ？」

ディルは、相変わらずタバコを美味しそうに吸っている。

「俺は、もう宣告はしたから三日後、迎えに来るだけだよ。お前は？」

俺は、短くなったタバコを踏み消した。

そういえば、一口しか吸っていなかった。

「俺は、まだ宣告していないんだよ……」

「は？まだしていないのか？」

デイルは、顔をしかめる。

「いや、これからするつもりさ」

新しくタバコを取り出すと火をつける。

「はー。ま、宣告は早めにしておいたほうがいいぞ」

デイルは、タバコを揉み消し立ち上がる。

「ああ。わかってる……ただ……」

そこまで、言いかけて俺は言葉を飲み込んだ。

「ん？」

デイルは、首を傾げて不思議そうな表情をする。

「いや……何でもない。もう、帰るんだろうっ？」

「まあな。とにかく、お前も早めに宣告して仕事に慣れるよ」

デイルは、そう云うと屋上を後にした。

わかってる……

そんな事、わかってる……

ただ、さっき思わずデイルの聞こうとして飲み込んだ言葉・・・

宣告しなかったらどうなる・・・

どうして、自分がそんな事を聞こうとしたのか・・・

頭を左右に振ってそんな思考を払い落とそうとする。

まだ、一週間ある・・・

ベンチに寝転がると紫煙を大きく吸い込む。

それを太陽目掛けて大きく吐き出す。

ずっと愛用してきたタバコの味が今日に限って、なぜか不味かった

#### 4話・屋上にて（後書き）

今まで、時間が空いた分、一気に書き進めようと思ってます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0514a/>

---

舞いふる雪

2010年10月21日21時38分発行